

岡山大学の「グローバル・ディスカバリー・プログラム」とIB教育： 文化人類学者としての日米での取り組みへの「振り返り」

鄭幸子(ちよんへんじゃ)
(岡山大学)

〔キーワード：日米比較、文化人類学、振り返り、Discovery Program for Global Learners at Okayama University、グローバル・ディスカバリー・プログラム、国際バカロレア、IB〕

はじめに

国際バカロレア (International Baccalaureate、以下、IB) の学習者像の一つに、「振り返りができる」(Reflective) ことが挙げられているがⁱ⁾、この「振り返り」は人類学でも重視されている。人類学は「人類について学ぶ学問」ということで広い分野をカバーしており、医療人類学や考古学、教育人類学等々、いくつもの分野に分かれている。また調査範囲も世界にまたがっているため、様々な文化を学び、違いを尊重し、自分の文化的なバイアスについても「振り返り」ができなければ、どれだけデータを集めても、バイアスに毒された解釈をしかねないということについて意識的にならざるを得ない。例えば、「見る」ということも実は、私たちは目の前にあるものを全て見ているわけではなく、無意識のうちに何に焦点を当てるかを決めている。私が専門とする文化人類学の学者で『菊と刀』でも有名なルース・ベネディクトも、文化や伝統によって、何をどのように注視すべきかが条件付けられていると述べている。こうした知見は、最近の認知科学 (Chabris *et al.*, 2011; Mlodinow 2009) でも検証されている。自分の「癖」やバイアスに気付くと、他の見方に対して「心を開」き易くなるのではないだろうか。このように、人類学、IB教育において共に「振り返り」が奨励されていることにも、両者の相性の良さが現れており、日本でももっと人類学を学べる機会が増えていくことを願っている。人類学者の振り返りにも様々な方法があるが、本稿では、私の日米の大学での経験を振り返りながら、IB教育と人類学の親和性の理解と、IB教育に関わる人々や機関の環境が更に良くなればという思いをベースに進めていきたい。

私とIB教育との出会いは、私が2015年に岡山大学への赴任を考えてからであるからごく最近と言える。岡山大学では教育改革に関する様々な取り組みや、IB教育

に携わっていらっしゃる国内外の様々な教職員や学生さんや保護者の方々との出会い、IB教育に関連したワークショップやシンポジウム、そしてIB教育の現場を見学する機会に恵まれた。このことにより、私が日米の大学で実践してきたことが、実はIB教育に通ずる、あるいは親和性の高い教育であったことに気づいた。つまりIB教育という言葉は知らなくても、実は私と同じような実践をしている方々が世界には相当いるのではないだろうか。

本論では実証的であることに重きをおき、分析も交えるようにした。今までの20年に及ぶアメリカの高等教育機関での経験や、岡山大学の「グローバル・ディスカバリー・プログラム」という4年制の学士プログラムの立ち上げから現在までの経験を、IBとの関連性を考えながら振り返りつつ、大学におけるIB教育の理念と実践の拡大と、IB教育に真摯に取り組んでおられる方々や機関に少しでも役立つことを願う。限られた紙面でもあるので、理論的な議論はまた別の機会に譲りたい。

1. IBプログラム

文部科学省のホームページでも紹介されているIBプログラムは、「国際的な視野」を持ち、「人間らしさと地球を共に守る責任を認識し、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する人間」の育成のために、「IBの学習者像」として以下の目標を掲げているⁱⁱ⁾。

- ・探求する人
- ・知識のある人
- ・考える人
- ・コミュニケーションができる人
- ・信念を持つ人
- ・心を開く人
- ・思いやりのある人
- ・挑戦する人
- ・バランスのとれた人
- ・振り返りができる人ⁱⁱⁱ⁾

学生に対してこうした目標を挙げる以上、教育を提供・推奨する側の人間や組織も、こうした目標を理念的に理解しているだけでなく、実践できているべきなのであろう。しかし、我が身を「振り返」ってみても、項目毎に得意不得意があり、達成度や実践度のばらつきがあることは否めない。学生や教師が目標に向かって努力するだけでなく、所属する組織自体が上記のような実践に価値を置き、

- ・探求する組織
- ・知識のある組織
- ・考える組織
- ・コミュニケーションができる組織
- ・信念を持つ組織
- ・心を開く組織
- ・思いやりのある組織
- ・挑戦する組織
- ・バランスのとれた組織
- ・振り返りができる組織

であるなら、私のような人間でも、IBの目指す人間像により近づきやすいと思う。

IB教育を語る時、学習者やカリキュラム、授業研究、教育方法、発問方法などについて語られるのと同程度に、学生や教員のみならず、彼ら・彼女らを取り巻く教育機関や政府自体が理想像に合致しているのか検証する必要があるだろう。まだ理想像に合致していない部分があるのなら、いかに理想像に近づく努力をしているかについて、もっと議論があれば、IB教育のさらなる広がりにも貢献するのではないだろうか。本稿では、私の日米での大学や大学院での経験をもとに、この点についても考えていきたい。

2. アメリカの大学での経験

私は2004年にアメリカの西海岸にあるUCLA (University of California, Los Angeles) の人類学部でPh.D.を取得したが、大学院での学びにもIB教育と通じるものがあったと感じている。例えば、あるゼミでは毎週、課題図書として英語の専門書を1冊ずつ読み、それについて議論することになっていた。それまで日本の公立や国立の教育機関で、先生の言ったことや書いたことは批判するより、そのまま受け入れたり覚えさせられたりすることの方が多かったように記憶していた私は、「大学院生ごときが著名な専門家をここまで批判していいのか？」

と最初は戸惑っていたものの、UCLAをはじめとするアメリカの教育機関では問いを立てる力をつけられた。クリティカルシンキング (Critical Thinking) と共に、問いを発することを重視することは、IB教育とも共通性がある。

しかし、今度は問いが立ちすぎて困った経験もある。*Performing Sex, Selling Heart: Korean Nightclub Hostesses in Japan* (Chung 2004) というタイトルの博士論文の執筆時にはUniversity of California Chancellor's Dissertation Year Fellowshipなどのフェローシップを複数頂戴し、大学院生としてはひとまず勉学に集中できる立場にいたにも関わらず、様々な問いが頭の中を駆け巡り七転八倒していた。

そんな中、IB教育に通ずる学部教育を実践しているリベラルアーツカレッジでフェローシップを頂きコロラドに引っ越すことになった。コロラドカレッジというコロラドスプリングスのダウンタウンに位置しながらも、ロッキー山脈が見渡せるキャンパスでRiley-Scholar-in-Residenceとして、研究と教育経験を積むことができた。

1874年創立のコロラドカレッジは、アメリカにあるいわゆるリベラルアーツカレッジの一つで、最新のUS NEWSのランキング (National Liberal Arts Colleges) では23位に位置している^{iv)}。2017-2018年の一年間の授業料がUS\$53,238、食事付きの寮費がUS\$12,076である。現在のレートで日本円に換算すると、一年間の学費が600万円を優に超える。つまり卒業までの4年間に2,500万円近いお金がかかる大学である。金銭的な負担はアメリカのアイビーリーグの大学に通うのと遜色が無いだけでなく、学力的にはアイビーリーグへの入学も可能な学力を持つ学生が、なぜアイビーリーグに比べれば知名度も劣る小規模のリベラルアーツカレッジを敢えて選ぶのか。理由の1つは、クリティカルシンキングを始めとするIB的な教育内容であるというのが、私が多くの学生と接してきて感じたことだ。

アメリカ東部のアイビーリーグの大学のみならず、アメリカには研究大学として名を馳せている大規模な大学は他にもある。UCLAもその一つであった。私は大学院生時代に、TA (Teaching Assistant) として、週20時間の労働の対価として授業料免除と、フルタイムの労働 (40時間) をした場合の半分の金額に相当する給料をもらった経験もある。大学側は質の管理が可能な大学院生を安価に確保できる。TAは学部生対象の授業を持ち、準備時間や採点などの仕事も行い、収入のみならず教歴も積めたことは大学院生としてのメリットであった。で

もTAの授業を受けるより、経験も知識も豊かな教授からもっと教養を受けられた方が良いのでは無いだろうかと思うことがあったが、大規模な研究大学の学部生の教育はTA無くして成り立たないのが現状だ。

一方、リベラルアーツカレッジではほとんどの授業が教授によって担当されており、大規模大学に比べれば、1クラスのサイズもぐっと小さいことが多いので、学生は教員をもっと身近に感じることができるだけでなく、教員も学生1人ひとりと接する時間が増え、共に学ぶことの喜びを共有できるというのが私のコロラドカレッジでの2年間の経験であった。

その翌年は、ハーバード大学からポストドクトラルフェローシップをもらいケンブリッジに引っ越した。ホームベースのライシャワー日本研究所のみならず、同じ建物の中にある韓国研究所やロシア研究所、キャンパスの別の建物にある人類学部や東アジア学部、別のキャンパスにある医学部の教員や学生、研究者とも刺激的な交流を持つことができた。「さすが、世界から様々な研究者や学生が集まってくるハーバード！」という経験をさせてもらったが、就職するなら、学部生の教育に向き合えるリベラルアーツカレッジが自分にはより合っているのではないかという気持ちが強くなった。

ハーバード大学の後も縁あって二つのリベラルアーツカレッジで教鞭を取ることができた。一つはハミルトンカレッジ。もう一つがスミスカレッジである。私が8年間在籍したハミルトンカレッジは1879年創立。US NEWSのランキング (National Liberal Arts Colleges) で18位^{v)}。2017-2018年の授業料が、US\$52,770、食事付きの寮費がUS\$13,400である。次に移ったのが、マサチューセッツ州にあるスミスカレッジである。それまで自身の教育も教員としても男女共学校で過ごしたことしかなかったのであるが、スミスカレッジでは女子大学を経験することができたのも貴重であった。スミスカレッジは1871年創立。US NEWSのランキング (National Liberal Arts Colleges) で12位^{vi)}。2017-2018年の授業料が、US\$50,044、食事付きの寮費がUS\$16,730である。ゆったりしたキャンパス、恵まれた自然、小規模のIB的な授業、教育に熱意を持つ教員との出会いは、私が教鞭をとったりリベラルアーツカレッジの長所であるなら、学費が4年間2500万円もかかってしまうことには、引っぱり続けてきた。各大学に奨学金制度やローン制度があるとは言え、こうした素晴らしい教育を受けるには、多くの場合、莫大なお金がかかるという問題点もIB教育との類似点と言えるかもしれない。

3. 岡山大学のグローバル・ディスカバリー・プログラム

1992年に渡米し、上記のような経験を積んできた私は、2015年に日本に戻ってきた。調査や研究を行う為に日本で過ごしていた時期もあるものの、23年の間アメリカの大学に籍を置き続けていた私が、なぜ日本に戻ってきたのか。こうした問いは日本に戻ってきてからも何度か受けてきた。この問いへの答えの中核が実は、大学においてもっと手頃な学費でIB的な教育を行える機会づくりが岡山大学でできるのではないかと思ったからである。

新幹線の全てののぞみが停車する岡山駅から北へ3キロ。岡山大学が演習林を持つ半田山を背に、岡山大学の津島キャンパスが広がる。このメインキャンパスのシンボルとも言われる時計台がある図書館には、学生たちがグループワークをするガラス張りの部屋が複数あるだけでなく、飲み物の自動販売機や可動式の椅子や机が設置されているラウンジまである。そこでお茶やコーヒー、ジュースを飲みながら歓談し一緒に勉強する学生たちのすぐ横、廊下を挟んだ隣には授業もできるオープンスペースが設けられており、図書館に来たついでに授業や講演を偶然目にもすることもできるようになっている。学生が積極的に参加する学びを推進しようとする岡山大学の姿が垣間見える。

津島キャンパスの南に位置する岡山県総合グラウンドには、野球場からテニスコート、体育館から武道館のみならず縄文時代以降の遺跡まであり、この地域の歴史を感じる^{vii)}。陸上競技場はサッカースタジアムとしての機能も果たし、地元のサッカークラブの試合がある日には、多くのファンがユニフォームを着て詰めかける。

そんな自然環境と都市の生活が程よくマッチした岡山大学は、日本の国立大学としては初めて、IBディプロマ資格修得者の書類審査入学制度を導入。入試改革にも生かしてきた。さらに文部科学省のスーパー・グローバル大学創生支援事業にも採択され^{viii)}、英語と日本語の両言語、あるいは英語だけで学びながら学士(学術)が取得できる「グローバル・ディスカバリー・プログラム」が2017年10月から始まった。日本語でも科目履修ができる「グローバル・ディスカバリー・プログラム」ではあるが共通言語は英語。IB教育を評価する岡山大学で、国立大学の授業料(現在は年額535,800円^{ix)})で、アメリカのリベラルアーツ的な教育を提供できるチャンスかもしれない、と思ったのが私が日本に戻ってきた理由の一つである。

日米の大学ではそれぞれに素晴らしい取り組みがある

一方で課題にも遭遇してきた。先ほど挙げたアメリカの大学の莫大な学費もその一つである。既存の学部の枠組みの中で一教員として取り組める限界も感じ、仕組みや慣習を変えるのは容易なことではないことを痛感する中、「グローバル・ディスカバリー・プログラム」では、仕組みづくりから関われる。こうした課題を事前に予見し、作る段階から過去の経験を生かした仕組みづくりをできるのでは、という点に大きな魅力を感じた。「グローバル・ディスカバリー・プログラム」の教員になるべく最初に採用された私は、IBの知見を大学教育にも生かすことも目標の一つとしてプログラム作りに関わってきた。

「グローバル・ディスカバリー・プログラム」は、単独の学部ではなく全学プログラムであるが故に、学生の興味や能力、日本語や学力に応じて、学部・学科を横断した学びが可能となっている。既存の学部では必修科目が相当数あるが、「グローバル・ディスカバリー・プログラム」では必修科目を極力抑え、学生が自らどんな学びをしたいのか考え実践できるようにカリキュラムを工夫してきた。つまり入学当初から「自分は大学で何を学びたいのか」という「問いを立てる」ことから始まる。

ただし、新入生にいきなり自分だけで考えなさいと放置したのでは、戸惑う学生も出てくると思うので、入学前教育をムードルというオンラインのプラットフォームを用いて行い^{x)}、その中で立ち現れる学生の興味に応じて、学生一人ひとりに「アカデミック・アドバイザー」が配置され、科目履修の相談に乗る。

「グローバル・ディスカバリー・プログラム」は1学年60人。4学年で240人の定員を預かる学士プログラムであり、比較的安い学費に加えて、様々な意味でのダイバーシティを目指したことも特色である。2017の第1期10月入学生は、30人の定員に対し20カ国以上からの応募があり、国際入試（定員30人）とは別個に若干人のIB入試枠も設けた。こうした入試の結果、アジアやアフリカ大陸、アメリカ大陸、ヨーロッパ大陸の20カ国以上から応募があり、16カ国から31人の学生を迎えた。

「国際入試」は英語で書かれた応募書類を元に第一次審査を通過した受験者が、第二次審査で英語面接を受ける。日本国外にいる人がわざわざ30分の面接の為に岡山大学まで来なくても良いように、オンラインでの面接も提言し実現した。また受験料の支払いもクレジットカードでの支払いが可能になるように提言し、これもシステムを作ってもらった例が示すように、それまでなかったシステム作りにも、グローバル化の一環として岡山大学が柔軟に対応したことが、「グローバル・ディスカバリー・プログラム」が幸先の良いスタートを切れた

要因の一つである。一方「IB入試」はIB Diplomaを持っているれば受験資格があり、現時点では面接も免除されている。「国際入試」では、IB Diplomaは要求されていないが、持っている学生はスコアを提出することもでき、今年度の国際入試の合格者にもIB Diploma保持者が複数名いて多様な背景を持つ学生との学びを満喫している。

ディスカバリー入試と呼ばれる日本国内からの応募者を主に想定したAO入試が2017年秋に30人の定員で行われ、2018年の4月に入学予定である^{xi)}。入試の詳細についてはホームページなどの資料を参照してもらうとして^{xii)}、こうした選抜で求める学生像は、IB認定校が価値を置く「IBの学習者像」（探求する人、知識のある人、考える人、コミュニケーションができる人、信念を持つ人、心を開く人、思いやりのある人、挑戦する人、バランスのとれた人、振り返りができる人）とも親和性が高いことを、カリキュラムを見ながら次に論じる^{xiii)}。

「グローバル・ディスカバリー・プログラム」のカリキュラムには、二つの柱がある。一つ目の柱は、既にIB校出身者が何人も学んできたマッチング・プログラムコース（MPコース）を引き継いだ形の「学部・学科横断型マッチング・トラック」。MPコースは11学部を擁する岡山大学で、学部の壁を超えた学びを可能にした10年に渡る取り組みであり、アメリカの大学のオープンカリキュラムを彷彿とさせる。私が勤めていたハミルトンカレッジでは、学生たちに「なぜこの大学を選んだのか」と尋ねると、「オープンカリキュラムだから」という答えをしばしば耳にし、自分の学びにあった選択ができるカリキュラムへのニーズを実感した。

二つ目の柱は「ディスカバリー専修トラック」だ。“Cultural Diversity and Communities,” “Social Innovation and Entrepreneurship” “Transdisciplinary Sciences for Global Sustainability”といったクラスター（科目群）があり、こちらは英語だけで履修しながら、卒業時には学士（学術）を取得できる。各クラスターの中には、以下のようなモジュールが準備されている。

- (1) “Cultural Diversity and Communities（文化的多様性とコミュニティ）”
 - (ア) Japan and Beyond（日本と周辺）
 - (イ) Migration and Communities（移動とコミュニティ）
 - (ウ) Environment and Health（環境と医療）
 - (エ) Governance（ガバナンス）
- (2) “Social Innovation and Entrepreneurship（社会的イノベーションとアントレプレナーシップ）”
 - (オ) Economics and Management（経済学と経営学）

- (カ) Social Business and Entrepreneurship (ソーシャルビジネスと社会的起業)
- (キ) Philanthropy and Nonprofit Management (フィランソロピーと非営利組織の経営)
- (3) “Transdisciplinary Sciences for Global Sustainability (持続可能性のための超域科学)”
- (ク) Astronomical and Atmospheric Spectroscopy (天文と大気分子工学)
- (ケ) Environmental Chemical Engineering (環境化学工学)
- (コ) Agricultural and Environmental Sciences (応用環境生態学と持続可能な農学)

“Cultural Diversity and Communities”のクラスターは人類学、社会学、政治学でPh.D.を持つ教員を中心に構成されている。“Social Innovation and Entrepreneurship”は、経済学や経営学、Philanthropyといった分野でPh.D.を持つ教員が担当。“Transdisciplinary Sciences for Global Sustainability”は、環境理工や、農学、理学系のPh.D.を持つ教員を中心に構成されている。

ディスカバリー教員は北米でPh.D.を取得した者も多く、北米の大学のナンバリングシステムも参考にしながら、教養教育科目(100番台)と専門教育科目は(200番台から600番台まで)というコース番号を「グローバル・ディスカバリー・プログラム」独自に作り出した。専門教育科目は更に5つのカテゴリーに分類されているので、似たような用語で混乱しやすい科目区分にコース番号を添えることで差異を明確化した。専門基礎科目は200番台、専門基本科目は300番台、専門課題科目は400番台、実践科目は500番台、そして卒業研究が600番台で、入学から卒業までどんな順番で科目を取ることが推奨されているかもわかりやすくなっている。

文化人類学者である私が中心になって担当する“Japan and Beyond”というモジュールは、先にも述べたようにディスカバリー専修トラックの中の“Cultural Diversity and Communities”(略称は“DCUL”)というクラスターの中にある4つのモジュールの一つである^{xiv)}。

“Japan and Beyond”のモジュールの中で、私が担当する教養教育科目の“DCUL 110 Cross-Cultural Experiences”では、自分が慣れ親しんできた価値観について「考え」「振り返」ることが求められる。専門基礎科目の“DCUL 210 Cultural Anthropology”では、他の文化に対して「知識」を深めるだけでなく、「心を開」いて多様な視点でものを見る力をつける。専門基本科目の“DCUL 310 Fieldwork and Ethnography”では、「探求する」ことは勿論、調査で出会う人々との「コミュニ

ケーション」や環境への「思いやり(配慮)」が求められる。特に後者は調査に求められる倫理観の養成にも繋がり、600番代の必修科目である卒論ゼミや卒業研究でも生きてくる。

学生生活は、将来の目標も見据えつつ、勉強、クラブやサークル活動、アルバイト、趣味、そして友人や家族との関係など、様々な要素から構成されている。「バランスのとれた」生活には「知性、身体、心のバランスをとることが大切」であることも念頭に、専門課題科目として“DCUL 433 Body and Mind”も提供する。この科目は、“Environment and Health”のモジュールの中で私が提供する。

他にも専門課題科目“DCUL 426 Ethnicity, Sexuality, and Class”を“Migration and Communities”のモジュールで提供する。つまり4つのモジュールが“Cultural Diversity and Communities”クラスターの中にまとめられており、文化人類学者、社会学者、医療人類学者、政治学者であるそれぞれの教員が、自分の専門分野のみならず、違った専門の授業を受講してきた学生のinterdisciplinaryな幅広い学びを奨励するカリキュラムとなっている。IB教育が目指す幅広い教育同様、「グローバル・ディスカバリー・プログラム」でも、学生に分野をまたいだ学びを奨励しているので、教員としても分野をまたいだ科目提供に「挑戦」した形だ。

「挑戦」と言えば、「グローバル・ディスカバリー・プログラム」作り自体が、挑戦の連続であった。「IBの学習者像」の中に、「不確実な事態に対し、熟慮し決断力を持って向き合い」「ひとりで、あるいは協力して新しい考え方や方法を探求」とあるが、大学執行部や教職員のこうした取り組み無くして、多様な背景を持つ第1期生を迎えることはできなかったであろう。

4. 課題と取り組み

IB教育はやりがいがあると同時に、教育者への負担も大きく、教員のバーンアウトを懸念する声もある。私自身、アメリカの大学でIBに通ずる教育を実践した経験からも同様の懸念がある。私の勤めていたリベラルアーツカレッジでは、クリティカルシンキングの養成を重視しており、学生には「問いを立てる」練習も、オンラインプラットフォームを利用しながら毎行なった。岡山大学が採用しているムードル以外にも、アメリカではブラックボードというオンラインプラットフォームも活用していた。

課題文献を読んでくることは他の先生方のコースと変

わらないが、私のコースでは受講者全員が毎回授業の前にディスカッションクエスト等課題を、オンラインプラットフォームを通じて受講生全員と共有する。例えばディスカッションクエストはyesやnoで答えられるような問いではなく、授業で活発なディスカッションを誘発するような問いをそれぞれ1パラグラフ程度にまとめてアップロードする。そして受講生はお互いのディスカッションクエストを授業の前に読んでおき、疑問点や自分なりの回答、自分の質問との関連性なども考えておく。毎回の授業毎にディスカッションのファシリテーションをする学生も2名ほど事前に決めておく。このペアは、なるべく多くの学生が発言しお互いの意見を聞き、有意義なディスカッションになるようにどの質問からどんな順番で進めていくか、おおよそのプランニングをするようには伝えてあるが、ディスカッションは生もの。強引に自分のプラン通りにディスカッションを仕切ることで活発な議論を断ち切るようなことがないよう、自分たちが流れに合わせてファシリテーションできるような柔軟性も求められる。このように伝えてあっても、ディスカッションが滞ったり、事実関係の情報が必要になったりした時、あるいはディスカッションがヒートアップし過ぎて収集がつかなくなった時など何か問題が発生した時や、議論の内容が理論とも繋がる時には、私が発言するようにしている。

例えば「性労働と感情労働」というコースでは、ある日は「売買春」に関する文献を読み、「売買春」の合法・非合法に関する問いかけが学生からあった。非合法化はもっともだという意見もあれば、合法化した方が税金も徴収できて良い、といった意見も出た。正解が一つであるような問いではないものの、自らの根本的な価値観を揺らがされて感情的なやりとりになることもある。そんな時は「みなさんが、非常に熱心に議論して問題意識を持っているのは素晴らしいことです。そこでここではディベートの練習もしましょう。ディベートでは、今までの自分の主張とは逆の立場で発言してもらいます」といった具合で私が介入することもある。学生は苦笑しながら、今度は必死で相手の立場に立った発言をすることで、相手の立場への理解が進むということもあった。

ただし、ディスカッションがどういった方向に進むかわからず、様々な可能性に対応するには、課題文献に通じているだけでなく、学生の質問もよく読み、吟味する必要があり、膨大な準備時間がかかる。しかも、一度講義ノートを準備したら、あとは当分、そのノートを元に授業を進められるといったことができない。というのは、クラス毎に受講生が変われば、出てくる質問やディス

カッションも変わってくるので、授業準備には毎回時間がかかる。ただし、私がそれをし続けることができたのは、学生が学びの喜びを見つけてくれたり、他の分野にも応用が効く学びの成果を実感してくれたり、やりがいや意義を感じたからだ。こうした努力は、ティーチングアワードという形で受講生や大学からも認められ大いに励みにはなったが、研究の時間を圧迫してしまうのも事実である。

IB的な教育を大学でも広めたいのであれば、IB教育にはいかに労力と時間がかかるかを認識し、授業準備にかかる労力が正当に評価されるシステムを作り、教員のバーンアウトを防ぐことが重要である。もう一つ「信念を持ち」「挑戦する」人材を育てたいのであれば、教職員や教育機関のシステム自体が挑戦された場合、挑戦に耳を傾け改善に向けて協働することができるのか自問することも必要であろう。自分たちが挑戦された場合は、ないことにしたり挑戦する人を排除したりするようでは、IB教育を自ら貶めていることにならないだろうか。

まとめ

私は日米で教育を受け、両国で大学教育にも携わった文化人類学者として、教員として2015年より「グローバル・ディスカバリー・プログラム」の立ち上げに関わってきた。IB教育を評価する入試制度にいち早く取り組んできた岡山大学で、積極的にIB校出身者を受け入れてきたMPコースを拡大発展させた「グローバル・ディスカバリー・プログラム」のIB教育との親和性について考察してみた。大学教育や人類学とIB教育の親和性について更に考察し、実践してもらえる契機になれば何よりである。

註

- i) http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/IB/_ics-Files/afieldfile/2015/02/09/1353422_01.pdf
- ii) http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/IB/_ics-Files/afieldfile/2015/02/09/1353422_01.pdf
- iii) Michael Carlsaw, Headmaster of St Leonards School, explains the IB Program, including these ten elements, in English. <https://www.youtube.com/watch?v=xA6as6cxf4M#t=359.538053822>
- iv) <https://www.usnews.com/best-colleges/colorado-college-1347>
- v) <https://www.usnews.com/best-colleges/hamilton-college-2728/overall-rankings>

- vi) <https://www.usnews.com/best-colleges/smith-college-2209/overall-rankings>
- vii) http://www.okayama-momo.jp/shisetsu/shisetsu_12.html
- viii) <https://tgu.mext.go.jp/universities/okayama-u/index.html>
- ix) https://www.okayama-u.ac.jp/tp/life/jyugyoury-ou1_1.html
- x) <https://moodle.org/?lang=ja>
- xi) http://discovery.okayama-u.ac.jp/jp/admissions/how_to_apply/discovery-application/
- xii) <http://discovery.okayama-u.ac.jp/jp/admissions/>
- xiii) http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/IB/_ics-Files/afieldfile/2015/02/09/1353422_01.pdf
- xiv) 残りの3つのモジュールは、“Migration and Communities,” “Environment and Health,” “Governance.”それぞれ社会学的、医療人類学的、政治学的なアプローチを柱にカリキュラムが組まれている。
- xv) http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/IB/_ics-Files/afieldfile/2015/02/09/1353422_01.pdf

: *How Randomness Rules Our Lives*. London : Vintage. Santrampurwala, Sara, Kosta Lekanides, Adam Rothwell, Jill Rutherford, and Trudgon Roz. (2013). *Theory of Knowledge : For the IB Diploma*. Oxford : Oxford University Press.

Santrampurwala, Sara, Kosta Lekanides, Adam Rothwell, Jill Rutherford, and Trudgon Roz. (2015). *Theory of Knowledge : For the IB Diploma*. Oxford : Oxford University Press.

文献

- キャロル犬飼ディクソン・森岡明美・井上志音・田原誠・山口えりか (2017) 『「知の理論をひもとく」UNPACKING TOK』伊藤印刷(株)出版部。
- 国際バカロレア機構 (2014) 「国際バカロレア(IB)の教育とは」.
- 国際バカロレア・ディプロマプログラムにおける「TOK」に関する調査研究協力者会議(2012)『国際バカロレア・ディプロマプログラム Theory of Knowledge 「TOK」について』.
- 田原誠・森岡明美(訳)(2015)『知の理論：国際バカロレア(IB)ディプロマプログラム準拠』オックスフォード大学出版局。
- 田原誠(2017)「IBと大学教育内容の親和性／IB生にとって理想の大学入学者選抜」大学教育再生加速プログラム採択シンポジウム「国際バカロレアをめぐる高大接続」発表(2017年2月22日 岡山大学)
- Benedict, R. (1967). *The Chrysanthemum and the Sword : Patterns of Japanese Culture*. Boston : Houghton Mifflin Harcourt.
- Chabris, C., & Daniel, S. (2011). *The Invisible Gorilla : How Our Intuitions Deceive Us*. Edinburgh: Harmony.
- Mlodinow, Leonard. (2009). *The Drunkard's Walk*

Discovery Program for Global Learners at Okayama University and IB Education: Reflections on My University Experiences in Japan and the United States of America

Haeng-ja Chung, Ph.D.
(Okayama University)

As a cultural anthropologist, I discovered the affinity between my teaching philosophy and IB education that values reflexivity. Educating students to become reflective critical thinkers is also the shared goal of the liberal arts colleges I had taught at for over a decade in the United States.

I decided to come back to Japan from the United States in 2015 when I was given an opportunity to pursue such education in a more affordable way at a Japanese national university. Due to the nature of labor-intensive and quality education, both liberal arts colleges and IB schools often ask high tuitions. Compare to the expensive private liberal arts colleges in the United States, the tuition of a Japanese national university is more affordable.

As the first Japanese national university, which started the special entrance examination for students with IB Diploma, Okayama University started the new English-medium college-degree program called Discovery Program for Global Learners (Hereafter, Discovery Program) in 2017. The program pursues diversity and social innovation for global sustainability while offering affordable higher education in English (and in Japanese for those with Japanese proficiency).

In this paper, I compare and contrast U.S. higher education (liberal arts college in particular) and the Discovery Program at Okayama University while paying attention to IB Learner Profile Attributes : Inquirers, Knowledgeable, Thinkers, Communicators, Principled, Open-Minded, Caring, Risk-Takers, Balanced, and Reflective. Some (if not all) elements of the profile are shared with many U.S. liberal arts colleges' mission statements. As one of the founding members of the Discovery Program and the first faculty member hired for this program, I have been trying to incorporate many of the above elements into the Discovery Program.

In order to encourage students to become knowledgeable, open-minded, caring, balanced, and reflective inquirers, thinkers, communicators, principled, and risk-takers, institutional environment is crucial. No matter how much students are taught to become the above type of person, if faculty, staff, and administrators behave otherwise, students get confused, lose trust in them, or both. Even if the faculty, staff, and administrators try to meet the expectations, if the institution does not support such efforts, the outcome is compromised. I hope that educational institutions as well as teaching and administrative staff make efforts to embody the persons of principles who are knowledgeable, open-minded, caring, balanced, and reflective inquirers, thinkers, communicators, and risk-takers.